

07

PHILIPPE WEISBECKER

BASE: PARIS, FRANCE

THEME: NOSTALGIES

糸、石けん、ブラシは自然素材のもの。
そして素朴なメキシコのキリストの絵



木製細工が入ったアルコールのボトル。ここ数年のあいだに、蚤の市でも見かけなくなった



「気に入った缶を重ねていたら、「あ、いいな」と思う瞬間があって買い足すようになった」

"Je collectionne la nostalgie de mon enfance"

「僕はノスタルジーを集めている」

「コレクションするのが好きなのではない。かつて、人が丁寧に仕事をしていた時代に扱っていたモノ、今では存在しないモノ、子供の頃を思い返させてくれるモノを手元に置いて、ときどき触るのが好きなんだ」。グレーと白で統一されたアトリエにある大きな収納棚を開くと、まるでタブローのように構成され、演出されたオブジェが現れる。「制作の合間に好きなものを眺めたり、並べ替えたりすると、インスピレーションを感じる状態になる」。オブジェの向こうにある人間の存在、モノの持つ魂を見つけたいと話すフィリップ・ワイズベッカー。テーマを決め、所蔵するオブジェをデッドストックのノートに描きためること多く、創作のベースにもなっている。蚤の市にはよく行くが、高価なものは絶対に買わない。早朝の散歩中、路上で拾うこともよくあるという。まるで、忘れられていたオブジェたちが、自分の居場所を求めて、彼の仕事場に辿り着いたかのようだ。集めたモノを捨てることはないと言う。壁面には、糸やブラシを並べた棚が不思議な調和を醸し出す。「テープなど使わなかった戦時中、母親は糸や紐を箱に集めていた。今でも私はきれいな紐をとっておく癖があるんだ」。そして色あせたピンクの紙包みを、手のひらの上で撫でながらワイズベッカーは言う「すごいだろ、父親が吸っていたのと全く同じ煙草を見つけたんだ!」。近いうちに、この煙草も、彼の極めてプライベートなインсталレーションに加えられるに違いない。

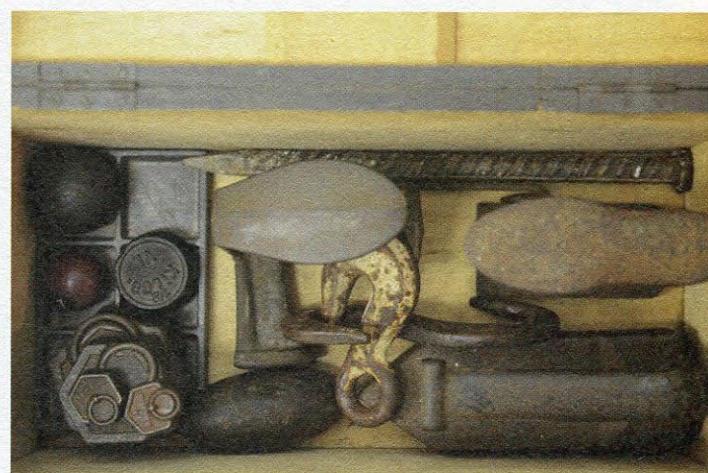


PHILIPPE WEISBECKER

フィリップ・ワイズベッカー 1942年フランス・パリ生まれ。国立装飾美術学校卒業後、1968年にニューヨークへ移り、アーティスト、イラストレーターとして活動を始める。現在は、パリ、バルセロナを拠点に活動。主なクライアントに、ハーマンミラー、アップル、エルメスなど。主な受賞に、JAGDA賞、NY ADC金賞などがある。



戦車の玩具。ワイズベッカーの父親は軍人だった



「重たいものが好きなんだ」。鉄のアイロンやおもりばかりをボックスの中に